

令和元年6月17日現在

機関番号：38002

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K03064

研究課題名(和文) 沖縄と朝鮮半島を跨ぐトランスナショナルな戦争記憶の歴史的考察

研究課題名(英文) Study on History of Transnational War Memory across Okinawa and Korea

研究代表者

若林 千代 (Wakabayashi, Chiyo)

沖縄大学・法経学部・教授

研究者番号：30322457

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、沖縄に関するトランスナショナルな戦争記憶について、おもに沖縄と朝鮮半島の関係に焦点を当て、1) 沖縄戦における朝鮮人、2) 米軍占領が沖縄における朝鮮人捕虜、3) 沖縄戦の朝鮮人に関する沖縄住民の記憶の生成、4) トランスナショナルな歴史記憶を通じた、平和教育や市民性教育、芸術、観光等の領域での文化生成等について検証した。主な成果として、日本軍および米軍関係の公文書により朝鮮人の動員や捕虜を実態を示す資料を収集した。また、有形無形の市民の戦争記憶のなかの朝鮮人(慰霊碑や文学、映像、市民活動他)について整理した。そして、沖縄と朝鮮半島を跨ぐ戦争記憶に関する文献目録の準備をすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、トランスナショナルな空間に跨った沖縄戦のなかの朝鮮人をめぐる歴史について、これまで自治体や市民がおこなってきた調査を整理し、さらに新たな調査によって空白を埋め、全体像を把握しようとした。また、沖縄において、沖縄戦のなかの朝鮮人に関する住民の記憶や関心について、米軍占領期から今日に至る歴史のなかで検証した。未来の課題として、日本のなかで「アジアのゲートウェイ」「アジアと日本の結節点」と位置づけられる沖縄において、そうしたトランスナショナルな戦争記憶を通じて、平和教育や市民性教育、芸術、観光等の領域でどのような新しい文化が生成されているか、また、どのような可能性があるかを検証した。

研究成果の概要(英文)：This research aimed to examine the transnational war memory across Okinawa and Korea, focusing on 1) the Koreans drafted by the Japanese Army during the Battle of Okinawa, 2) the Korean POWs in Okinawa under the U.S. occupation, 3) the formation of war memory on the Koreans in Okinawa, 4) the formation and the potential of cultural practices (education, art, tourism, etc) through transnational war memory of the Battle of Okinawa. Main results are: First, we discovered the historical documents in both the U.S. and Japanese archives, in which the actual conditions of the drafted or killed Koreans and the POWs reveal. Secondly, we researched the representations and imagery of the Koreans in the Battle of Okinawa in the cultural practices (memorials, literary works, films, civic activities, etc). Thirdly, through this research, we prepared the bibliography and the list of the official documents with the transnational war memory across Okinawa and Korea for future publishing relating.

研究分野：東アジア国際関係史、沖縄現代史

キーワード：沖縄 朝鮮半島 戦争記憶 沖縄戦 捕虜 戦争動員 トランスナショナル 東アジア

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

これまで、日本における沖縄戦のなかの朝鮮人に関する研究は、自治体の地域史研究や沖縄戦研究全体のなかでわずかに触れられるのみであり、また、実態調査にしても、人権団体や市民団体などがおこなったものはあるが、部分的なものに限られ、継続性のあるものではなかった。また、韓国においても、戦後補償に関連した民間団体による部分的な調査があるのみで、これもまた断片的で、継続性のあるものではなく、総合的な把握とは言えなかった。同時に、これらの研究は、時期的には沖縄戦の時期のみに焦点が当てられており、朝鮮人が「軍夫」「慰安婦」として沖縄に移動するまでの過程、社会経済的背景、あるいは、戦闘終了後の生存者の実態も十分に調査されていなかった。さらに、ハワイの捕虜収容所や米軍占領下の沖縄に残存した朝鮮人、また、朝鮮半島に帰還した際の調査や実態など、トランスナショナルな実態の検証は十分なされていなかった。

本研究は、これまで沖縄の自治体や市民がおこなってきた部分的で断片的な調査を整理し、さらにその断片をつなぎ合わせ、新たな調査によって空白を埋め、さらに、トランスナショナルな空間に跨った沖縄戦のなかの朝鮮人をめぐる歴史を把握することを目的とするものだった。同時に、沖縄において、沖縄戦のなかの朝鮮人に関する住民の記憶や関心がどのようなものか、米軍占領期から今日に至る歴史のなかで検証し、また、未来の課題として、日本のなかで「アジアのゲートウェイ」「アジアと日本の結節点」と位置づけられている沖縄において、そうしたトランスナショナルな戦争記憶を通じて、平和教育や市民性教育、芸術、観光等の領域でどのような新しい文化が生成されているか、また、どのような可能性があるか、検証しようとした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、沖縄におけるトランスナショナルな戦争記憶について、おもに沖縄と朝鮮半島の関係に焦点を当て、歴史的に検証するものであった。本研究は3つの部分に分けられる。第1に、沖縄戦における朝鮮人(軍夫・慰安婦他)の実態、また、沖縄やハワイ、朝鮮半島に跨がる朝鮮人捕虜の収容、米軍占領下の沖縄における朝鮮人の実態等、公文書およびインタビュー調査他に基づいて精査すること、第2に、沖縄戦のなかの朝鮮人に関する沖縄住民の記憶の生成、それを通じた戦争記憶について、文献やインタビュー、現場の調査を通じて明らかにすること、第3に、そうしたトランスナショナルな歴史記憶を通じて、平和教育や市民性教育、芸術、観光等の領域でどのような新しい文化が生成されているか、また、どのような可能性があるかについて検証することであった。

3. 研究の方法

本研究では、研究目的を達成するため、(1)国内調査、(2)海外調査、(3)インタビュー調査、慰霊碑、芸術作品、市民活動の調査、(4)資料の整理と翻訳を基礎作業とした。その資料の検討と課題の確認のため、(5)研究会をおこない、研究会毎に進捗状況と問題点を明らかにし、必要に応じて再調査した。さらに、3年間の調査研究の結果は暫定的に目録化し、必要に応じて公開し、論文にまとめた。同時に、市民活動や芸術、観光等におけるさまざまな文化生成の事例を分析した。今後、資料目録を完成させ、関係する図書館や研究教育機関を通じて公開する予定にしている。

4. 研究成果

平成28年度には、まず、予備調査として、若林千代(研究代表者)、金美恵(研究分担者)は、沖本富貴子(研究協力者)とともに、静岡県浜松市において竹内康人氏(静岡県近代史研究会)、京都府京都市にて庵途由香氏(立命館大学コリア研究センター)への聞き取り調査をおこなった。これによって、これまで日本と韓国でおこなわれてきた戦時強制連行調査における沖縄戦における朝鮮人(軍夫・慰安婦他)の実態調査の内容や課題、調査の及んでいない領域について知見を広げることができた。また、それを通じて、今後の調査計画を再確認することができた。

その後、沖縄戦における朝鮮人(軍夫・慰安婦他)の実態、沖縄やハワイ、朝鮮半島に跨がる朝鮮人捕虜の収容、米軍占領下の沖縄における朝鮮人の実態等について、公文書を精査するため、研究代表者と研究分担者(金)は、国立国会図書館憲政資料室にて米国公文書(GHQ/SCAP日本占領関連資料)を閲覧、調査した。また、内閣府沖縄振興局沖縄戦資料閲覧室にて、厚生省関連公文書、法務省関連公文書、防衛省防衛研究所歴史資料、および米国公文書に関する調査、国立国会図書館東京館憲政資料室にて調査をおこなった。さらに、研究代表者は、米国国立公文書館メリーランド分館、および、米国議会図書館にて、米国公文書の調査をおこなった。

同時に、沖縄戦のなかの朝鮮人に関する沖縄住民の記憶の生成、それを通じた戦争記憶について、また、トランスナショナルな歴史記憶を通じて、平和教育や市民性教育、芸術、観光等の領域でどのような新しい文化が生成されているかについて、許点淑(研究分担者)は、韓国慶山にて沖縄戦の遺族(配偶者・子弟)を対象に、彼らが語る沖縄戦と沖縄戦犠牲者遺族の活動及び行政(慶山市福祉政策課長)が行っている慰霊碑の管理及び慰霊祭について資料収集と聞き取り調査を行った。また、「沖縄北部における観光の現状とダークツーリズムの可能性について 伊江島を事例に」をテーマに、伊江島観光協会の関係者、財団法人「わびあいの里

又チドゥタカラの家」館長、教育委員会の方々と住民を対象に3泊4日間資料収集と聞き取り調査をおこなった。また、韓国の亜細亜太平洋戦争歴史研究所中央会（研究所長）、日帝強制動員被害者支援財団に聞き取り調査と資料収集をおこなった。

これらの調査と併行し、研究代表者および分担者は、日本および韓国、他のアジア地域でおこなわれた関連する学術大会・研究会において報告をおこない、専門家や研究者と意見交換をおこなった。また、適宜、調査に関する小規模の研究会や意見交換・情報交換のためのミーティングをおこない、当該研究の進捗状況を確認し、また、課題を共有した。

平成29年度には、1)基礎資料の収集作業を継続すること、2)関連研究の交流を通じて、考察の枠組みや知見を広げること、の2点について研究をおこなった。

まず、1)基礎資料の収集作業については、厚生省関連公文書、法務省関連公文書、防衛省防衛研究所歴史資料（内閣府沖縄振興局沖縄戦資料閲覧室）のみならず、研究代表者が平成28年度に申請した、国立公文書館に保存されている日本軍第32軍関連の公文書、とくに「留守名簿」を精査することによって、朝鮮人「軍夫」の動向を把握しようとした。これについては、研究協力者として、沖本富貴子氏の協力を得て、資料収集と同時に、考察したものを論文として発表した。しかし、「留守名簿」の公開は、想像した以上に分量が多いただけでなく、公開までの処理が長引いており、現状でもすべての申請に対する公開がなされているわけではない。そのため、研究代表者と研究協力者（沖本富貴子）は、とくに朝鮮人「軍夫」によって組織されていた部隊（水上勤務隊）を中心に資料を収集した。この考察を元に、研究協力者は、水上勤務隊の実態の考察をおこない、「沖縄戦に動員された朝鮮人に関する考察—特設水上勤務隊を中心に—」（『地域研究』20、2017年）にまとめ、沖縄大学で開催された、第11回「強制動員真相究明研究大会」に参加し、研究協力者の沖本富貴子氏が研究報告をおこなった。

沖本論文は、先に研究代表者らが聞き取りをおこなった竹内康人氏が2012年に明らかにした、沖縄戦に動員された朝鮮人軍人軍属が配置された部隊とその人数について、より沖縄に近づけて分析し、その結果、特設水上勤務隊以外にも32軍防衛築城隊、歩兵隊、海軍の設営隊など65部隊以上にわたって少なくとも3,500人余が動員されていたことが分かった。また、部隊別に死亡者数と時期と場所を集計し、本島においては首里の攻防や南部に追い詰められて犠牲になったものが多く、また、海軍においては小禄、豊見城で6月14日前後に命を落としていることを明らかにした。この考察によって、「沖縄戦には『朝鮮人軍夫』が『1~2万人』動員され、『雑役』を担った」とする定説が再検証され、さらに「朝鮮人軍夫」という表現をめぐっても、その妥当性に検討が加えられた。同時に、朝鮮人部隊であった特設水上勤務隊について、戦時資料や留守名簿、陣中日誌に照らし、編成から沖縄での港湾作業につくまでを詳細にトレースし、また、港湾作業がどのようなものであったか、その実態についても、当時の陣中日誌及び住民の証言も交えて具体的に示すことができた。

併行して、研究分担者（金美恵）は、沖縄県内に点在する、沖縄戦朝鮮人犠牲者に関する慰霊碑を調査し、設立経緯について関係者インタビューをおこない、それらの碑文について分析した。また、研究代表者は、米国国立公文書館において、沖縄戦に動員された朝鮮人が米軍の捕虜となった後、どのような経緯を辿っていったかについて、また、朝鮮戦争と沖縄の関係について、とくに住民政策に関連する問題について、米軍や国防総省の資料を精査した。米国国立公文書における、沖縄戦に動員された朝鮮人が米軍の捕虜となった後、どのような経緯を辿っていったかについては、現状、その公文書の把握にかなりの時間を要しており、今後の課題である。米国公文書の分類の点から見ても、資料が複数のRecord Groupにまたがって存在しているため、調査には時間を要すると思われる。ただ、ハワイ準州（当時）の収容所における朝鮮人捕虜の動向については、ハワイ準州の強制収容所と捕虜に関する先行研究があることがわかり、そうした研究を参照しつつ、調査が進んでいない部分を埋めていくことが可能ではないかと考えている。

これらの調査の作業と併せて、関連研究の交流を通じた考察の枠組みや知見を広げるため、平成29年9月、韓国の東アジア史研究の代表的な研究者である白永瑞氏を招いて、東アジアにおける「新しい人文学」という枠組みと歴史学の刷新に関する、韓国における議論について学んだ。とくに、歴史記憶が政治的問題に直結する東アジアにおいて、険しい過去を振り返ることの意味について新たな知見を得た。

平成30年度は、1)基礎資料の収集作業を継続すること、2)関連研究の交流を通じて、考察の枠組みや知見を広げること、の2点について引き続き研究をおこなった。

まず、1)基礎資料の収集作業については、引き続き、研究代表者が、平成28年度に申請した、国立公文書館に保存されている日本軍第32軍関連の公文書、とくに「留守名簿」を精査することによって、朝鮮人「軍夫」の動向を把握しようとした。これについては、研究協力者（沖本富貴子）の協力を得て、資料収集をおこなった。また、研究代表者は、沖縄県公文書館および国会図書館が収集した米国公文書のなかで、沖縄戦に動員された朝鮮人が米軍の捕虜となった後、どのような経緯を辿っていったかについて、また、朝鮮戦争と沖縄の関係について、とくに住民政策に関連する問題について、引き続き資料を精査した。また、研究分担者の金美恵は、沖縄戦後の朝鮮人の引揚について調査した。

とくに、研究協力者（沖本富貴子）は、前年の水上勤務隊の実態に関する考察において課題として残された動員された朝鮮人の数値に関して、「沖縄戦の朝鮮人—数値の検証—」（『地域研究』21、2018年）をまとめた。沖縄戦に動員された朝鮮人については、まず、これまでの通説

となっている数値「1~2万人」という根拠をさまざまな書誌や報道から探り、それらの数値を裏付ける正確な根拠となるデータがなく、現状では、日本政府から韓国政府に渡された軍人軍属の「留守名簿」等の考察のみで、その数値は約3,500人までを確認できることを示した。同時に、この他の動員の可能性を検討し、調査の必要性を示した。また、慶良間諸島や宮古諸島、八重山諸島については、現在のところほぼ解明されている動員数を示した。

また、研究代表者は研究分担者（金）とともに、韓国国家記録院および植民地歴史博物館の協力を得て、韓国における資料について調査した。加えて、沖縄戦のなかの朝鮮人に関する映像資料についても調査した。映像資料は、1）米軍が記録した写真および映像、2）報道記録の映像、3）ドキュメンタリー作品の3つに大別される。

これらの調査と併行し、研究代表者および分担者は、日本および韓国、他のアジア地域でおこなわれた関連する学術大会・研究会において報告をおこない、専門家や研究者と意見交換をおこなった。また、沖縄に調査旅行や学術研修に来る韓国の大学生や大学院生、研究者らが沖縄の朝鮮人犠牲者の慰霊碑を訪問するフィールドワークに同行し、歴史の学習における課題について知見を得た。さらに、ハワイにおける日本軍捕虜収容に関する研究を進めている秋山かおり氏（国立歴史民族博物館外来研究員）とも面談し、資料と研究の現状について意見交換をおこなった。

今後、平成28年度から3カ年に収集調査した資料目録を作成し、関係する学術教育機関を通じて公開する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

若林千代「変容するアジアと沖縄—経済グローバル化と戦争の記憶—」『平和研究』46、査読有、2016、43~62

金美恵「沖縄戦で犠牲となった朝鮮人の慰霊碑（塔）・追悼碑に関する研究ノート」『地域研究』20、査読無、2017、103~120

沖本富貴子「沖縄戦に動員された朝鮮人に関する考察—特設水上勤務隊を中心に—」『地域研究』20、査読有、2017、29~53

沖本富貴子「沖縄戦の朝鮮人—数値の検証—」『地域研究』21、査読有、2018、45~65

〔学会発表〕(計9件)

若林千代「沖縄から考える東アジアの平和と共生社会の実現」、第7回東アジア批判的雑誌会議（創批出版社・亜際書院共催）招待講演、国際学会、2016、創批社、ソウル市（韓国）

Chiyo Wakabayashi(若林千代) "War Memory and Resistance to Militarism: Literature, Photography, and Film in Post-Reversion Okinawa", Inter-Asia Cultural Studies Summer School 2016、招待講演、国際学会、2016、嶺南大学、香港

Chiyo Wakabayashi(若林千代) "Land Dispossession and Community in Distress", Institute of Trans-Division and Border Studies at the Shinhan University Annual International Conference "Peace, Conflict and Local Agency: Boderlands in Korea and Beyond", 招待講演、国際学会、2016、ソウル・アートセンター、ソウル市（韓国）

金美恵「沖縄の朝鮮人—ペ・ポンギさんを通じて見る在沖朝鮮人史—」、東京大学大学院総合文化研究科・共生のための国際哲学研究センター（UTCP）招待講演、国際学会、2016、東京大学駒場、東京都目黒区

金美恵「在沖朝鮮人史」、芸術経営支援センター（韓国）2016年プロジェクト調査支援機関協力プロジェクト、招待講演、国際学会、2016、阪田スタジオ、那覇市

許点淑「戦後沖縄における平和する市民団体—朝鮮人軍夫と市民団体の平和活動とダークツーリズムの可能性—」、韓国日本学会第93回学術大会、国際学会、2016、釜山市（韓国）

若林千代「アジア・パラドックスの時代と沖縄『民衆』の想像」、韓国・全南大学湖南学院国際学術会議「グローバル化時代の東アジアの民衆と共感場」、招待講演、国際学会、2017、全南大学、光州市（韓国）

沖本富貴子「特設水上勤務隊について」、第11回強制動員真相究明全国研究集会、招待講演、2018、沖縄大学、那覇市

Chiyo Wakabayashi(若林千代) "Imagining the Third World/Asia-Africa Solidarity in 'Reversion Movement' in Okinawa under the U.S. Occupation", Association of Cultural Studies: Crossroads in Cultural Studies 2018、招待講演、国際学会、上海大学、上海市（中国）

〔図書〕(計1件)

金美恵『自己を証明する—アジアでの国籍・旅券・登録—』、聖公会大学東アジア研究所学術叢書、2017、347ページ

〔産業財産権〕

出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

（国際研究集会）

国際学術ワークショップ「白永瑞『共生への道と核心現場—実践課題としての東アジア—』
をめぐって」、2017、沖縄大学、那覇市

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：金美恵
ローマ字氏名：KIM Mihye
所属研究機関名：東京大学
部局名：大学院総合文化研究科
職名：特任研究員
研究者番号（8桁）：00774142

研究分担者氏名：許 点淑
ローマ字氏名：HEO Jeomsug
所属研究機関名：名桜大学
部局名：国際学類
職名：上級准教授
研究者番号（8桁）：00412867

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：沖本富貴子
ローマ字氏名：OKIMOTO Fukiko

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。